

黒人研究会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.65 (June 23, 2007)

第65号 2007年6月23日

例会発表要旨

1月例会 2007年1月27日 神戸市外国語大学

① 1960年代カリフォルニア州オークランドにおける「自由を想像すること」と「黒人」コミュニティ

——ブラック・パンサー党のコミュニティ・プログラムを中心に——

高廣 凡子

従来の研究史上においてアメリカ合衆国における1960年代の黒人運動は、「アイデンティティ・ポリティクス」や「人種の再定義」という言葉で積極的に特徴付けられる。だが他方、運動の人種性のみへの注目は、昨今、とりわけ1960年代後半の運動をアメリカ分裂の元凶とするような多文化論争における批判を生み出しもした。これは、当該期運動を人種アイデンティティをめぐる運動として記憶することによる、人種の問題化によって運動が必然的に帯びた政治性の等閑視という一般的な問題と関わっているといえるだろう。

このことを踏まえ本報告では、上記の意味でも、その過激なスタイルと修辞のためだけに最も誤って記憶されることになる黒人組織ブラック・パンサー党の歴史的意義を明らかにした。

本報告では特に、党を生み出したオークランドという都市空間が、党の思想的基盤形成に決定的影響を及ぼした点を指摘し、「サバイバル・プログラム」と呼ばれる党によるコミュニティ奉仕活動の実態解明を試みた。ここでは、法的権利獲得後のアメリカ黒人にとって「自由」が抽象的な言葉になっていく中、党は修辞的言葉ではなく、希薄化していく国家の福祉政策に代替的なプログラムの実践を通して、物質的豊かさや身体的快樂といった自由とは別の形の自由と未来のコミュニティの姿を人びとに垣間見せたことが明らかとなった。パンサー党の「サバイバル・プログラム」はコミュニティの貧しい人びとに対して実際に奉仕したという点だけではなく、実践を通して国家へのオルタナティブを提示することで当該期アメリカ社会の矛盾や欠陥を暴きだした点において政治性を帯びた非常に重要な運動であったといえよう。

② Caryl Phillips: 25 Years of Writing, University of Liege, Belgium, 1-2 December 2006 の報告

加藤 恒彦

この国際学会は、キャリル・フィリップスの作家生活25年を記念し、ベルギーのリエージュ大学の「ポスト・コロニアル・教育、研究所」(代表Benedicte Ledent)の主催で開催された。基調講演者を始め、25名の発表(うち、カリブからの発表者2名が来れなかった)があった。参加者名簿は51名であった。発表者を地域的に見れば、地元のベルギーはもとより、ドイツ、フランス、オーストリア、イタリア、キプロス、イギリス、アメリカ、カリブ地域、ブラジル、アフリカ、シンガポール、日本となる。日本からは、今回は私一人であった。例会で小林先生に指摘され気が付いたが、参加者の殆どが白人の研究者や院生で占められていた。3年前、イタリアのベラージオで開催されたカリブ文学研究者や作家の小さな集いでは半数ばかりがカリブ出身者であったのとは対照的であった。

フィリップスは大会開催中、現地に入っており、夜のディナーには参加したが、大会そのものには、最終日の記念講演以外には参加しなかった。論じる当の作家が出席していると、作品解釈についての議論の際に、研究者相互の自由なディスカッションを阻害することを懸念したものと思われる。

* * *

私は殆どのパネルに関し、質問や自身の意見を述べたが、その動機になったのは、肝心のフィリップスのテキストがあまりしっかり読み込まれていないという苛立ちがあった。研究会では具体的にその例を述べたが、特に最近の若い研究者はポスト・モダン、ポスト・コロニアル理論にとらわれ、肝心のテキストの読みがおろそかになっているという印象を持ったのである。ニュークリティシズムが全盛の時代、テキスト分析が重んじられる反面、社会、歴史、思想的側面が極端に軽視されたのだが、それと逆の偏向が起きていると考える。

* * *

フィリップスの記念講演

フィリップスは記念講演として13歳のときのパキスタン移民のAliという少年のことを語った。フィリップスは、白人労働者階級の住むリーズで育ったのだが、学校ではいつも唯一の黒人少年で、いじめの対象となり、「喧嘩をしては逃げる」ということの繰り返しであったという。フィリップスの表現によれば、“I was not a trouble maker, but the trouble maker.”であったそうだ。そうしたなかで、新学期にこのAli君がやってきたのだ。そしていじめが始まり、あるとき、学校にバスで行く途中、白人の生徒たちはAli君のカバンのなかの教科書をバスの二階の窓から放り投げてしまったという。それでもAli君は“Silent dignity”をもって耐えていたそうである。それを見るに見かねたフィリップスは、学校の事務室にAli君を連れて行き、事情を説明したという。しかし、事務室は何もしてくれなかったという。だが、それ以後、フィリップスはAli君の間には友情は育たなかったという。カリブ出身の移民の場合には、皮膚の色の違いを除いて言語、教育、文化、宗教等でイギリスと近い関係にあるのにたいし、言語が違う上に、回教国である点が決定的に理解の溝となっていたようである。

フィリップスが、2005年の4人のパキスタン人の若者によるロンドン地下鉄のテロのニュースを聞いたとき、思い出したのは、Ali君のことであったという。そして、それ以後の一連のヨーロッパにおけるイスラム教徒との摩擦事件（漫画、ローマ法王の発言）や最近のオランダにおけるムスリムの女性の公開の場での頭巾の着用を違法化する動きや、フランスやドイツにおける、類似の動きが、ますますヨーロッパにおけるパキスタン人の疎外感をあおり、ファンダメンタリズムに追いやることを懸念していたのである。

2月例会 2007年2月24日 キャンパスプラザ京都

① Nella LarsenのQuicksandにおけるTuskegee Instituteの影響

船田 麻衣子

ハーレム・ルネッサンス期の黒人女性作家Nella Larsenの1928年の作品Quicksandは、主人公の混血女性Helga Craneが、アメリカとデンマークを舞台に自己のアイデンティティと幸せを追い求める物語である。

一方、創立125周年を迎えたTuskegee大学は、2006年のTuskegee Magazine秋号に“Celebrating 125 years of Excellence and Service”と題して、大学長のPayton氏は、Booker T. Washingtonの偉大なる遺産に敬意を表している。Tuskegee大学の母体となるTuskegee Instituteのservice精神は、黒人たちが白人社会に貢献、奉仕するというservice精神がWashingtonの教育理念を通して見受けられる。Quicksandに登場するNaxosの大学は、Tuskegee Instituteがモデルであると言われているが、Larsenは否定的、批判的にその大学を描いている。また、Quicksandには、どこの世界にも受け入れてもらえないHelgaの存在が徐々に「物」として扱われる様子が描かれている。

本発表では、過去のTuskegee大学を再考することによって見えてくるservice精神そして、Tuskegee InstituteがLarsenのQuicksandにどのように影響を与えているのか、そして社会変容に伴いTuskegee大学のservice精神が125年の歴史の中でどのように変化しているのかについても検討した。

② ポストカトリーナ・ニューオリンズの報告

藤川 二葉

歴史的なハリケーン「カトリーナ」から約一年半が経ち、その記憶はアメリカ国内でさえうすれている感がある。しかしニューオリンズに住んでいると、ハリケーンの痕跡を感じずに過ぎる日は全くなく、むしろ間断なく感じさせられる。つまりいまだにニューオリンズは、人びとがよくいうように、「ポストカトリーナ」のニューオリンズでしかない。

私は博士論文の現地調査のために、ハリケーンの一週間前にニューオリンズに到着、避難先のアトランタで10ヶ月過ごし、再びニューオリンズに戻って半年滞在した。戻ったときの第一印象は、復興が遅れている、に尽きた。道ばたに残ったままのゴミと瓦礫、壊れた、あるいは火事の跡のまま残された家。避難した人びとの帰還を阻む、物価の上昇と賃貸住宅の家賃の高騰。政府による補償の遅延。犯罪率の悪化。

これらの状況は、超大国アメリカで起こったこととは考えにくい。最も大きな被害をうけた第9区の光景は、とてもアメリカには見えない。アメリカという国がどういう国なのか、理想の影にもっているものが何か、ということをも改めて考えさせられた。ハリケーン直後の政府の対応を、人種問題化する議論が多くみられる。また、今回の問題は人種というより階級だったのだが、階級自体が人種化されているのだ、という意見も聞いた。

一方、素晴らしかったのがセカンドラインというニューオーリンズの伝統のパレードである。奴隷制廃止後に黒人の人びとによって組織された自助団体の活動と、ブラスバンドという音楽文化が出会い生まれた。たくさんの人が参加してブラスバンドのジャズにあわせて踊る。すごいエネルギーに圧倒される。このような独特の文化は、復興が遅れているという状況において非常に大きな意味がある。つまりそれは希望のしるしであり、人間や文化の強さや人生の美しさの証である。困難や悲劇を、芸術や音楽などのポジティブな表現文化の資源にするということが、黒人文化の特徴のひとつだが、ポストカトリーナ・ニューオーリンズは、まさにそのことを肌で感じさせる場所だった。

4月例会 2007年4月28日 神戸市外国語大学

① トニ・モリスンの『パラダイス』にみる楽園の所在—ユートピア、エコトピア、ヘテロトピア

浅井 千晶

ヨーロッパから移住した白人が新世界で新たな楽園を建設しようと夢見、ネイティブ・アメリカンが白人により奪取・抑圧された土地と伝承世界を回復しようと試みるなら、奴隷とし連行されてきたアフリカン・アメリカンはどのような楽園を北米の大地に創出することができるのか。モリスンは『パラダイス』においてその可能性を模索する。

今回の発表では、十九世紀末にオクラホマの奥地に築いたブラックタウン、ヘイヴンの精神を引き継ぐルービーに亀裂が顕現する理由の一つを、本来のエコロジカルなトポスからの乖離にみた。他方、ルービーの北方にある「修道院」では、植物が育つ土壌が保持されている。修道院は混沌を孕みつつ、料理、儀式、宗教性を帯びた自然を介して、そこへ漂着した女たちに心身の回復をもたらす場所である。ミシェル・フーコーによれば、ユートピア（理想郷）が実際の場所をもたない非現実的空間であるのに対し、ヘテロトピア（混在郷）は、ある文化のすべての場所の外部にありながら現実中存在する場所である。修道院は危機のヘテロトピアと逸脱のヘテロトピアが交錯する場であり、『パラダイス』は人種や外見を問題としない楽園としての他なる空間を創り出す試みとして解釈した。

② 映画『ダーウィンの悪夢』とアフリカ——その映像と批評紹介

古川 哲史

最近、アフリカ関連の新作映画の上映が日本で相次いでいる。アフリカを舞台にした欧米の作品やアフリカ人映画監督の巨匠といわれるセンベヌ・ウスマンの作品などが公開されている。昨年アカデミー外国語作品賞を受賞した南アフリカの『ツォツィ』も公開中である。こうした背景に、映画産業自体が国際化してきたこと、西洋の価値観の反省にもとづく作品の増加などいくつかの解釈を見ることができるが、昨今のグローバリズムがもたらす政治・社会問題と密接に繋がった現象であろう。

映画『ダーウィンの悪夢』(フランス・オーストリア・ベルギー、2004年)は欧米で様々な話題を提供し、社会論争を引き起こしたドキュメンタリー作品である。日本では2005年に山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映され、その後、各地の映画館で公開されている。監督はオーストリア生まれで現在フランス在住のフーベルト・ザウパー。タンザニアのビクトリア湖畔の町ムワンザを舞台に、外来魚のナイルパーチを商品化する水産加工業の発展、EUに輸出するため旧ソ連地域からやってくるパイロットと飛行機、パイロットの相手をする現地の女性、漁師たちとエイズ問題、ナイルパーチの残り物を食べる地元民、ストリート・チルドレンなどが描かれる。そしてヨーロッパから飛んでくる貨物輸送機には、アフリカの内戦を支える武器が詰まれていることが示唆される。

私がムワンザを訪れたのは20年も前のことであるが、映画を見つつ、ムワンザからケニアに渡るドイツ製の古い客船に乗りビクトリア湖を北上したことを思い出した。当時はナイルパーチ産業がこれほどの規模になるとは誰も予想していなかったであろう。現在では、EUに次いで日本が第二のナイルパーチ輸入国で、白身魚の冷凍フィレとして年間3,000トンが輸入されているといわれる。日本人にも直接係わりのある問題である。

この映画は、ナイルパーチが湖の生態系や町の社会経済を変えていることを描きつつ、先進諸国によるアフリカ諸国のグローバリズム的な構造的搾取の問題を扱っている。〈食糧と武器〉の物語でもある。テーマは重く、取材の困難さは監督自身がいくつものメディアで語っている。しかし、個人的には、編集方法を含めて大変違和感を覚えた作品であった。この映画が事実を偏って伝えている、アフリカのポジティブな面が描かれていないとのタンザニア人による批判も多い。現地で長年調査する日本のアフリカ研究者からの批判もある。

ザウパー監督は2005年10月に東京外国語大学で行われた討論会で、「ありのままの
アフリカを表現することが重要なわけではありません。そんなものは存在しないのだから。
ただ私の目を通したアフリカ、私の目を通した現実を表現したいだけなのです」(西谷修編
『グローバル化と奈落の夢』、せりか書房、2006年)と述べている。確かにその通りである。
しかし、それでも違和感が残る。監督の本来の意図ではないであろうが、結果的に、この
映画は誰を観客に想定して製作するかという点においても、完成作品についての議論に参
加する点においても、批判し、批判される点においても、「当事者」の不在が感じられず
にはられない。グローバルな時代におけるドキュメンタリー映画のあり様、とりわけ表現の
自由と、その作品が監督の手を離れて与える当事者への影響という問題——しばしば倫
理と想像力の問題を考えさせられる。

5月例会 2007年5月19日 キャンパスプラザ京都

特 別 報 告

Asian Studies at HBCU: Present and Future

UEDA Yoko

The purpose of this presentation is two-fold: one is to discuss the current situation of Asian studies at Historically Black Colleges and Universities (HBCU) in relation to institutional priorities and, the other, the relevancy of Asian studies within globalization and diversification debate in academia. Asian studies at HBCU have never been a significant part of the college curriculum. This is so because, unlike Traditionally White Institutions (TWI), HBCU has had a special mission to foster Black leaders who are capable of bridging the White and the Black. At HBCU, therefore, students are taught Black history, heritage and culture while being trained in the academic fields that TWI places the first priority such as science and technology. Asian studies have been caught between these two institutional goals of HBCU and forgotten. This is evident from the fact that Spelman College for example is one of the two institutions among 121 HBCU which offer Asian studies program. At the time of globalization, rising cost of higher education and current debate over relevancy of HBCU, Asian studies are increasingly losing their relevancy at HBCU. Only if

HBCU becomes a competitive institution among the general higher educational institutions, Asian studies may survive playing a significant role in the diversification of higher education.

ミニ・シンポジウム <フランス語圏におけるアフリカ系作家たちの呼応>

司会 : 中地 幸

① ネグリチュードとパリのアフリカ系作家たち

木内 徹

I. ネグリチュードとは何か

ネグリチュードとは、「アフリカの黒人の文化・伝統の独自性を主張し、その価値を積極的に評価しようとする立場」である。アフリカは一つであるとして、植民地主義からの脱却を求めるアフリカの民族主義的運動であった、パンアフリカニズムの盛り上がり背景にして、エメ・セゼール(1913-)、レオポルド・サンゴール(1906-2001)、レオン＝ゴントラン・ダマス(1912-)といったヨーロッパ的教養を身につけた、フランス領の西インド諸島、アフリカ出身の黒人詩人たちが、1930年代にパリで起こした文化運動の思想的基盤となった概念である。

II. ネグリチュードと、パリのアフリカ系作家たちの呼応

ネグリチュードにまつわる、パリのアフリカ系作家たちの呼応は、パン・アフリカニズムの影響から始まった。マーカス・ガーヴェイの説いたナショナリズムが、世界的規模のアフリカ系の人々の呼応としては、もっとも大きなものであろう。

1931年に、ポーレット・ナルダルが創刊した『黒人世界』誌、ジャック・ルマンが創刊した『現地レビュー』、セゼールらが創刊した『黒人学生』によって、北米、カリブ海、パリのアフリカ系作家たちが呼応した。

ネグリチュード運動のもとに出版された作品は、セゼールの詩集『祖国復帰ノート』、ジャック・ルマンの『露の支配者たち』である。1947年に、ネグリチュード運動の一環によって、雑誌『アフリカの現在』が、アリュン・ジョップによって創刊された。リチャード・ライトは、この雑誌創刊に深く関わった。

III. ネグリチュードと、パリのアフリカ系作家たちの呼応——その後

フランツ・ファノン(1925-61)は、『黒い皮膚・白い仮面』(1952)において、ネグリチュードの思想的あいまいさを乗り越えようとした。1961年に、『地に呪われた者』を出版し、ポストコロニアリズムの先駆的主唱者と目されている。

② モリスンとルーヴル(1)——パリ博覧会(1900)とモリスンのルーヴルでの特別展(2006)を通してみる「プロGRESS」

森 あおい

本発表では、W.E.B.デュ・ボイスが関わったパリ博覧会(1900)と、トニ・モリスンが企画して開催されたルーヴル博物館での特別展(2006)を比較検討し、「プロGRESS」について考察した。

パリ博覧会は、19世紀の科学・産業技術の「プロGRESS」をテーマに開催された。この博覧会で黒人展が開催され、そのための資料収集を行ったのがデュ・ボイスであった。彼は、奴隷解放後の黒人の「プロGRESS」を写真や統計を通して提示し、否定的な黒人のイメージを修正しようとした。その成果は博覧会でも認められ、金メダルを受賞する。しかし、アメリカのメディアは、黒人プレスを除いてこの企画をほとんど無視した。

パリ博覧会の開催から百年余りを経た2006年11月にモリスンは、アメリカ人として初めてルーヴル博物館で特別展を企画する。“Foreigner’s Home”という題で行われたモリスンの基調講演では、テオドール・ジェリコーの「メデューズ号の筏」がメタファーとして紹介され、故郷を追われる恐怖と、異国で新しい家を見出そうとする希望の可能性が、人種や時代の違いを超越して提示された。

パリ博で、デュ・ボイスの企画はアメリカ館から締め出され、他国との寄り合い所帯での展示となった。言い換えれば、彼はアメリカ人の代表とは見なされなかったのだ。それから100余年がたち、モリスンはアメリカ人を代表して芸術の都、パリのルーヴルで特別展を指揮した。デュ・ボイスが憂いたヴェールも少なくとも一部のアフリカン・アメリカンからは取り除かれたと言えるだろう。もっとも世の中は格差社会と呼ばれるようになり、貧富の差はますます拡大している。このような状況にあって、モリスンの企画は、人類の「プロGRESS」のために芸術が果たしうる役割を示している。

③ モリスンとルーヴル(2)——ディアスポラ作家の痛みと創造性

2006年11月17日18日両日、トニ・モリスンが指揮をとりルーブル美術館で行われた企画展「異邦人の故郷(Foreigner's Home)」と関連する催しに参加するため、在外研究先のプリンストン大学からパリへと飛んだ。モリスン協会からは総勢32名の研究者がこのツアーに参加したが、そのうち日本人は青山学院大学名誉教授の吉田廸子先生と私の二名であった。今回の発表では、パリでの二日間について時系列に沿って報告しつつ、一連の企画全体を貫くと思われるテーマについての考察を試みた。なお、現地で私が参加した催しとは、モリスン本人による次作Mercyからの朗読会、モリスン学会主催の米・仏・英の研究者によるラウンドテーブル、およびモリスンが選んだ4名の作家たちによる作品朗読とモリスンとの対話である。

今回冒頭部分らしき神秘的な場面が披露されたMercyは、17世紀ニューイングランドの植民地に舞台設定されているということである。完成が待たれる。また、モリスン協会主催のラウンドテーブルでは、主にフランスの大学で外国文学としてモリスンを教えている研究者たちによって、「外国人研究者が他者の経験を伝えるモリスン文学を取り上げ論ずる際、そこに存在する心理的・感情的距離にいかに対処しうるか」という難問をめぐる、教育現場の体験や翻訳・出版事情について熱い議論が交わされた。さらに、モリスンと彼女が選んだ四人の作家たちMichael Ondaatje、Boris Diop、Edwidge Danticat、Fatou Diomeによる対話では、祖国を離れ完全な所属が不可能な異国に身を置いて、優位な他者の文化と言語に取り囲まれつつ母語以外の言語で創作活動を続ける彼らが経験する痛みと葛藤と、それを乗り越え創造的なエネルギーへと転化する可能性について語られていた。

モリスンは基調講演の中で、歴史上今日に至るまで世界規模で人々が強いられている故郷との強制的別離と、その結果経験する生存を賭けた苦闘、そこに生ずる人間の極限的な希望と絶望のあり様や、残酷な疎外の状況とアイデンティティの危機などの問題に触れている。今回の企画全体を通してモリスンが表現しようとしていたのは、祖国／原点からの別離、分断、疎外、漂流と、その結果強いられる変容を経験するディアスポラ的状况を生きる者たちが、その根こぎにされた存在の心もとなさが生む痛みや絶望を生き延び、異郷で新たな故郷＝Homeを築こうと苦闘するプロセスで、いかにして原点の奪還が不可能な過酷な喪失の体験を新たな創造のプロセスへとtranslateしていくのか、というグローバルな問いかけであったように思われる。そうした観点から、一連の企画を見渡すと、「原点からの距離」が避けがたくもたらず本来ネガティブなはずの「変容」からポジティブな創造物を生み出そうとする意志が透かし見えてくるように感じた。また、企画展の中で、「原点」にあったはずの人間の生の体験を証言するテキストとしての「身体」、その「原点」を私たちが今一度追体験するための媒体としての「身体」について興味深い展示が行われていたこ

とも付け加えておきたい。パリでの二日間は、多くの哲学的問いを突きつけられると同時に、日本の風土の中で外国文学である黒人文学を理解しようとする私たちの行為も、あるいは一連の創造的なtranslationにささやかに参加することになりうるかもしれないとの思いを抱かせてくれた貴重な体験であった。

会員からの投稿

アメリカの小学6年生の学習で基本とされるアフリカ系アメリカ人に関する知識とは

須田 稔

2007. 2. 7付『しんぶん赤旗』に「英統一カリキュラム改訂へ」という記事があった。サッチャー政権が「1988年教育改革法」で導入した全国統一カリキュラムの改訂草案を、英教育技術省の外郭団体である資格・カリキュラム機構(QCA)が2月5日に発表したという。国民的議論を経て6月初めに閣議決定、新カリキュラムによる授業は2008年9月から段階的に開始の予定とある。

「1988年教育改革法」については、安倍晋三氏が著書『美しい国へ』で「自虐的な偏向教育の是正」と「教育水準の向上」の点で称賛し、首相の諮問機関「教育再生会議」で「全国共通学力テスト」や「バウチャー制」の実施を提言させることになったものだ。英国の教育改革が20年を経て是正を迫られたことを安倍氏はどう考察するのか。

この記事はロンドンの岡崎衆史記者の発信。「奴隷貿易といった大英帝国の負の遺産の学習も盛り込まれ【筆者注・『美しい国へ』で著者は「八八年の改革では、教科書の記述に、バランスをとるという観点がとりいれられた。たとえば、植民地における奴隷労働の「負」の面を書いたら、イギリスが世界にさきがけて奴隷貿易を廃止したこともきちんと載せる、というものだ。けっして自画自賛する記述はしない。」と書いている】、その中で、奴隷制廃止運動の闘士であるエクイアーノ(一七五〇-九七)やウィルバーフォース(一七五九-一八三三)についても学ぶといえます。」とある。

この2人、Peter M. Bergman のThe Chronological History of the Negro in America (Mentor Books, 1969) に記載はない。小学館の『ランダムハウス英和大辞典』には、オラウダ・エクイアーノは「Vassa, Gustavus (Olaudah Equiano (c.1745-1801?): 西インド諸島でアフリカの奴隷として売られたが、自由を得たあと英国で奴隷制廃止論者・作家として活躍し

た。」と解説されており、「Wilberforce, 2 William (1759–1833):英国の政治家・奴隷制廃止論者・著述家;1 Samuelの父」とある。『広辞苑第五版』にエクイアーノはないが、ウィルバーフォースは「イギリスの下院議員。奴隷解放運動に尽力。」とある。

この2人をつなぐだろう記述が上記の『年代史』にあるので、全文を紹介しよう。“The British Act of August 1833 gave the slave holders in the West Indies compensation of £20,000,000 for the abolition of slavery. All children younger than six years, or all new-born were freed. All slaves became free but house slaves had to work for their old masters for five years and the plantation slaves were to work for seven years before freedom. At this time there were 800,000 slaves in the British West Indies. On the Isle of Antigua the Negroes were set free immediately. ”

ここからが表題に即した記述になるが、昨秋、京都市内の書店で、The Core Knowledge Series の

WHAT YOUR 6TH GRADER NEEDS TO KNOW : Fundamentals of a Good Sixth-Grade Education (A DELTA Book, 1995)を買った。ヴァージニア大学教授・E.D. Hirsch編とある。言語学・文学の研究者のようだ。著書、編著書は10冊を数える。本書の内容は大きくは I. LANGUAGE ARTS, II. GEOGRAPHY, WORLD CIVILIZATION, AND AMERICAN CIVILIZATION, III. FINE ARTS, IV. MATHEMATICS, V. NATURAL SCIENCES という構成。I は物語と演説、詩、神話、言語と文学、格言、外国のことば、から成る。「物語」は抜粋で、Romeo and Juliet, Oliver Twist, The Secret Garden, Animal Farm, Anne Frank: The Diary of a Young Girl, そしてMaya AngelouのI Know Why the Caged Bird Sings。「演説」はJ.F. KennedyのInaugural AddressとM. L. King, Jr.の“I Have a Dream”。「詩」16篇のうち、L. HughesのLife Is Fine, Harlem, The Negro Speaks of Rivers, J.W. JohnsonのLift Ev' ry Voice and Sing, P.L. DunbarのSympathy, Maya AngelouのCaged BirdとWoman Workで、アフリカ系アメリカ人詩人の作品が7篇。この比率には驚嘆する。

1年生から5年生までのも見ないと全体を判断できないのだが、選定の基準は多分ポジティブと言えるのではないか。NATURAL SCIENCESの最後にStories of Scientistsという項目があって、ライト兄弟やアインシュタイン博士など6人が扱われているのだが、Percy Lavon Julianというアフリカ系アメリカ人化学者が入っている。緑内障の瞳孔収縮剤の精製者だ。初めて知る人だが、上記の『年代記』の1935年に2行の記述がある。日本でアイヌや琉球人や在日の言語芸術が、小学生から高校生までの期間に、どれほど検定教科書に収録されているのか、調べてみる必要があると気づくのである。

もっとも、例えば広島と長崎への原爆投下については、「決死の覚悟の日本人を相手にしてはアメリカ軍は甚大な死傷者を出さだろうからと決断された」と記すだけで、反省も謝罪もない。“President Truman knew that the Japanese were trained to fight to the death.

He believed that Japan could be invaded only at a huge cost in American lives. So in order to force the Japanese to surrender, Truman ordered the dropping of two atomic bombs on Japan.” ヴェトナム戦争についても「侵略した」とは書かない。日系アメリカ人の強制抑留が人種主義による不正義だった “a terrible injustice, an injustice bred by racism.” と書くのは、同じアメリカ市民にたいして冒した罪という意識のせいだろうか。

W.E.B. Du Boisはthe great African-American scholar, Thurgood Marshallはa brilliant African-

American lawyerだが、1980年代後半にアパルトヘイト解体を書いてもNelson Mandelaの名はない。McCarthyismを「植民地時代のアメリカの魔女狩りになぞらえる人びともいた」と書くが、その犠牲者については、“Thousands of people were fired or forced to resign from government positions.” と記述するだけ。Emancipation Proclamationに言及するが、H.B. StoweもUncle Tom’s Cabinも、John Brownも、ましてHarriet TubmanやSojourner Truthはない。あるのは “Since the time of slavery, African-American leaders like Frederick Douglass and later W. E. B. Du Bois had fought for equal rights for black Americans.” で、フレデリック・ダグラスの名が一度だけ出ているさまなのだ。

この著作の弱点をあげつらうのではない。小学校6年生に、あるいは6年生までに、学習すべきと考える基本事項には、どういうものがあるか、選択の視点・基準はどういうものであるべきか、記述の科学性をどうして保証するのか、叙述の形式や方法はどうか、など確かに事は容易ではないのだ。

問題は教育とはなにか、「一般教育」は“general education”の、「一般教養」は“general culture”の訳語だが、「専門的(の)」の対語としてすませていいのか。“general”の類語の“common”「集団が共有する」、「popular」 「人民全体の」、「universal」 「人類普遍の」をすべて包含する概念と捉えるべきではないのか。「公教育」というのは、「人民の、人民による、人民のための教育」ということではないのか。「教養」を『広辞苑第五版』は「単なる学殖・多識とは異なり、一定の文化理想を体得し、それによって個人が身につけた創造的な理解力や知識。その内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる。」と解説する。上出来の定義だとわたしは思うが、上記の本が“THE CORE KNOWLEDGE SERIES”, “FUNDAMENTALS of … EDUCATION”と銘打つものだから、あれこれ考えさせられるのだ。日本の小・中・高校、そして大学の各段階で、「核」なり「基本」となる「知識」「教育」「教養」とは何か、「学力」とは何か、とりわけ教師や研究者はよくよく思索せねばならない。教養なく品格なく、言語も行状も美しくない、そんな政治家・議員・知事・市長を選出した主権者の学力も問われている今日、「専制と隷従、圧迫と偏狭」(日本国憲法前文より)を体験してきた、いまま体験している人びとに寄り添い、その人びとの視点からその歴史と文化を解明しようとする黒人研究の会の会員の社会的責任は大きいのではないか。

(立命館大学名誉教授)

My Experience in Kenya (Dec. 2006 – Jan. 2007)

Suzuko Morikawa (森川 鈴子)

I arrived in Olosho Oibor in the Maasailand, about 60 km (40 miles) west of Nairobi, in mid-December. I joined Sami, my friend from Philadelphia, to live with Peninah Topisia, the only medical assistant in the entire Olosho Oibor village and neighboring areas along with two other volunteer nurses from the United States. Sami and I were there to disseminate the information on HIV/AIDS to raise awareness, especially among Maasai women.

My experience in the Maasailand was simply soul-stirring and impressive. The Maasai are truly beautiful and good (in their language, the same word means both things). Under conditions of no running water, and very limited electricity and food, they exemplified the importance of caring and sharing, spirituality, perseverance, and strength. They never complain or become self-centered no matter how difficult their lives are, and work extremely hard, especially women and children. The life with the Maasai people was indeed challenging sometimes; I must admit that carrying gallons of water was strenuous and I did miss washing machines and big meal portions, but there is nothing I could exchange this valuable experience with.

After my two weeks' stay in the Maasailand, I traveled to Samburu, in the northern part of Kenya. Due to unusually severe rain in December across almost all of Kenya, Maasai Mara, the greatest game reserve in Africa (recently it's been declared the seventh wonder of the world), was totally shut down; therefore, Samburu became an alternative for many tourists. I was of course a little disappointed about this diversion in the beginning, yet, later I felt fortunate to see magnificent Mount Kenya (elevation – 5,199 metres/17,058 feet), the second highest mountain in Africa after Kilimanjaro, as well as Samburu villages. While the Samburu are a different ethnic group than the Maasai, both groups share some similarities, such as language and dress. As much as I was critical about our “touristy” safari tour, I must admit that animals were so beautiful and majestic, as was the surrounding nature.

The next destination was the coast side. We had a long bus ride to Mombasa, and stayed there for one day. I started to see more Muslim and Asian influence in this Indian coastal town, especially when we were woken up by the prayer from the mosque at 4 a.m. In the following morning, we headed to the most beautiful island I have visited in my life – Lamu. The 7-hour bus ride was pretty challenging, in terms of ventilation, heat, and a little anxiety for our safety due to a political situation involving Somali refugees, but once we arrived at this historic Swahili island, we were absolutely rejuvenated. Streets were never more than 8 feet wide, and therefore, we had to walk every part of the island since the taxi service, i.e. donkey, could be slow and costly. Unfortunately, I had to return to Nairobi earlier due to my flight schedule, so I could not spend enough time to explore an entire island. I would love to visit there again in the future.

My last landmark event was a visit to Kibera, the world's second and Africa's most populated settlement, a so-called slum. It's located just 5 kilometers/3 miles from the city center of Nairobi. In roughly 2.5 square kilometers/ 600 acres 1.2 million people reside. Since the Nubian settlement after World War I ("Kibera" derives from "Kibra" in Nubia, meaning forest), the British colonial government assigned the Nubian population to these areas without giving them the title to the land, in order to guard against resistance from the Kikuyu-dominated Mau Mau Movement in the 1950s. Kibera today consists of diverse ethnic groups. I met Nubians, Kikuyus, Luos, Maasais, and other foreign nationals, such as Congolese. Beyond my preconceived notion of slum being dangerous, I felt quite safe. People are financially struggling, but far from miserable. I could see a light of dignity.

My life in Kenya seems so far away after having returned to my busy life in this cold stormy Chicago. As much as I regret that I did not document exactly how I had perceived in each place I was, I wanted to let my mind and heart be unbridled and be as elusive as I wish. In hindsight, here are some of my insights and thoughts:

- 1) Richness of nature and people's respect for such nature– Magnificent nature, such as mountains, ocean, trees, animals, flowers, and soil were beyond any expression. Kenyans fully utilized it without damaging or changing existing natural world order.

- 2) Harmony of Kenyan society – As much as I am critical about the history of colonial creation of each African country, I witness the harmony and recently developed Kenyan

identity especially among young people. Given the existence of minor political conflicts among different ethnic groups, people cooperate and interact with one another while maintaining their own identity and respect for other groups' culture in Kenya. It was also nice to hear that Kenyan history from the origin of humanity and civilization of Eastern Africa to today has been well taught in high school curriculum.

3) Effects of colonialism – On the other side of the point above, I could not help lamenting the evidence of European colonialism, such as excessive worship for a western culture of acquisitiveness, aesthetics, artificial food products...etc. Psychological imposition of inferiority complex due to technological scarcity and race consciousness due to white supremacy harms their profound spirituality. It was heart wrenching to see.

4) Arrogance and poverty of life in a so-called “developed country,” especially the United States – I heard from many volunteers that we should feel fortunate about what we have in the U.S. I do agree with that to a certain extent; however, I also could not help deeming that economically and technologically developed countries really are spiritually underdeveloped. People destroy nature and exploit other human beings just for sheer greed and forget what we really do not have. We have lost person – to – person communication by e-mail or telephone, the value of eating, cooking, and dining together for excessive artificial food, natural exercise for convenient transportation and advanced technology, and profound friendship and kinship relationships for busy individualistic lives. We are surrounded by mental illness, stress, academic and job peer pressure, and I told the Kenyans that we are not necessarily happy in technologically advanced society.

I was fortunate to think more critically and observe more thoroughly my experience in Kenya this winter than any other travel opportunity I had in the past. This trip certainly enriched my life and educated me tremendously, and I hope I can share these findings with my friends and colleagues, but most importantly with my students. I would like to thank all the people who supported me mentally and especially financially for this valuable experience.

(Chicago State University シカゴ州立大学助教
授)

海外のメディアから

今年独立50周年を迎えたガーナ関連の記事を2本。1本目は故ンクルマ初代大統領の娘サミア・ヤバ・ンクルマのインタビュー。もうひとつは英国の奴隷制廃止200周年を記念して3月にガーナで行われた式典で噴出した過去の残虐行為に対する義憤を伝えるもの。

① Kwame Nkrumah had wanted to come back to Ghana after 1966 coup: says his daughter, Samia

Ganaweb (<http://www.ghanaweb.com>, 16 February 2007)

Ghanaweb correspondent in Italy, Reggie Tagoe, was in Rome to cover the Press Conference hosted by the Ghana Embassy in Italy to launch activities planned for Ghana @ 50 and incidentally met Samia Yaba Nkrumah, daughter of the first President of Ghana –the late Dr. Osagyefo Kwame Nkrumah. He requested for an interview after the meeting which she obliged.

Below is the full text of that interview

Reggie Tagoe (RT): Samia, It's pleasure meeting you.

Samia: Thank you. It's a pleasure to meet you too, and to be here today listening to H.E. Ambassador, Agyei-Amoama, launch Ghana's Golden Jubilee celebration program in Italy.

RT: How is your family doing and where are they now?

Samia: My mother, Fathia, and my older brother, Gamal, are living in Cairo, Egypt. Our eldest brother, Francis, is in Ghana, while Sekou, the youngest brother is between Ghana and the United States. I am very lucky to have my three brothers. There is great understanding between us despite the fact that we all live in different countries.

RT: How old now is your mother, Madam Fathia Nkrumah?

Samia: She is now 75 years.

RT: Dr. Kwame Nkrumah was a great politician how did he mix his political duties with family life at home?

Samia: My father's priority was his work. We got to understand this at an early age. And we also understood that his life was in danger on many occasions and this necessitated a different kind of family relationship. A man who has had to endure half a dozen

assassination attempts on his life, and some of them with lasting physical damage, must take certain precautions even if these included being separated from his family.

Aside from the question of danger, there was very little time at hand. There were many problems confronting early independent Ghana. If you read his book, *Africa Must Unite*, you understand that the newly independent Ghana did not have a single industry, no infrastructure whatsoever, no skilled labour, no educated workforce, after years of Colonial rule, the country had nothing. Everything had to be constructed from scratch.

RT: Tell me something about the family in your early years as you grew up.

Samia: When I was younger it felt that we, Nkrumah's immediate family, had to take second place in his life. We did not see much of our father and we did not spend much time with him. But as I grew, I saw that in a sense his presence with us has been constant and powerful and his influence on us has been understandably huge. I have said before that while he left us no material inheritance, he left us a rich consciousness that continues to guide us in our lives. We have a solid understanding that we Africans hold the key to solving our problems. I have no doubt that as he once said, "When Africa becomes a strong and united nation, Africans will respect themselves and everyone will respect Africans." When you are serving a big cause, a cause that concerns many people, you do not see a difference between the personal and the public. Personal sacrifices are not regarded as losses but as great gains because your happiness is linked to many others. That is how Nkrumah lived his life up till the very end and that is what he has transmitted to us his children.

RT: Where was the family when he was overthrown in the Military coup on February 24, 1966 and what happened thereafter?

Samia: My mother and the three of us, Gamal, Sekou and myself, were in Flagstaff House on the day of the coup. With help from the Egyptian Embassy at the time, we left Ghana on the same day on an Egyptair flight for Cairo. Naturally, spending the whole day not knowing what is going to happen to you in the company of young, and at times frightened, soldiers taking orders from their commanders is quite a terrifying experience for any child, but that is another story to be told at another time.

RT: Was he in contact with the family whilst in exile and did he mention anything about the coup and the people who ousted him from power?

Samia: Father spoke to us on the phone on very few occasions. We corresponded on a regular, if not frequent, basis. He did not talk to us about his plans and work. Nkrumah, however, detailed all his experiences and thoughts in the various books he wrote after the

coup while living in Guinea. Nkrumah wrote some 14 books on various subjects ranging from the African unity project to specific problems in certain African countries at the time, see *Challenge of the Congo and Rhodesia*. Many of the books were completed while he was in Guinea after 1966. In his book, *Dark Days in Ghana*, he talks exhaustively about the coup. RT: In cases about some former African Presidents or Heads of State forced out of power they tried to get back to power through any means, did Dr. Kwame Nkrumah plan to get back to be President of Ghana after the Feb. 24, 1966 coup, was there any desire in him for power in Ghana?

Samia: Nkrumah never lost sight of Ghana and never gave up on his dream and social development. One could not happen without the other. He certainly wanted to get back to Ghana and never lost hope of doing so. If he had returned to Ghana, there would have been fundamental changes. For example, he had said that the coup had made plain that the CPP could not longer follow the old line and it had to develop and reform. At the same time, he was equally concerned with diffusing his ideas on Pan-Africanism because he was convinced that they would outlive him anyway.

RT: What do you think were Dr. Kwame Nkrumah's ambitions?

Samia: In a nutshell, his only ambition was the full realization of the dignity of the African wherever he or she might be in the world. To realize this, he championed an African solution in the form of the Pan-African Project and within this project he called for the economic, social and political development of the continent along continental lines. To Nkrumah, the optimum zone of development for Africans is the whole continent. He believed that if the resources and population of African States were pulled together, development planned and executed continentally, Africa would be far ahead. Nkrumah was convinced that only a strong, economically viable African Nation, or a United States of Africa, would address the continents' problems. He also understood that a stable, peaceful African continent would contribute to world peace and advancement. Ghana was his starting point, however. With the various development plans in place at the time, Ghana was to become a model of economic advancement and freedom and from there able to safeguard its political freedom.

RT: He was talking of 'Nkrumaism' when his countrymen and women did not even clearly understand what democracy is all about. What's your take on that?

Samia: I would urge you to read Nkrumah's books to get an idea of what he was about. Let's not forget that a relentless character assassination was carried out against him. He couldn't have got everything right, I'm sure, but in the 15 years he was in power,

1951–1966, Ghana had made great social and economic leaps. By 1966, there were factories, roads, railways, radio and TV stations, telephone services, the Akosombo Dam ... The list is endless. It was important to make accessible the African Unity ideas to the people of Ghana. You cannot rely on economic unification only, you have to understand why the call for unity and back it with political will. To do so, you need people's acceptance and understanding of the concept of unity. Unity is a culture that must be understood and not imposed on people and therefore it had to be explained.

It is telling that 40 years on, the slogan on the official site of the African Union (AU) is Africa Must Unite, which is one of the titles of Nkrumah's books and his main thesis. It is interesting that the AU is championing many of the steps that were recommended by Nkrumah in the early sixties. It is also interesting that some great African leaders, like the late Julius Nyerere of Tanzania, who at the time were not totally convinced of Nkrumah's Pan-African project eventually came to understand and agree with it.

RT: He imprisoned his political opponents against the backdrop of freedom, justice and independence. What was he aiming to achieve?

Samia: Let me first say that I wish to sincerely apologize to any Ghanaian who was imprisoned in the name of Nkrumah. It saddens me to know that anyone suffered for their political beliefs. I am an advocate of freedom and democracy and human rights. And I am strongly opposed to violence as a way of reacting to any problem.

But before answering your question fully, we have to examine the context in which those actions were taken. At a time when the new Ghanaian government was busy laying the foundation for the industrialization of the country, laying plans for education, medical services, utilities, factories, road networks, etc. Nkrumah's government was subjected to untold economic and political pressure and external interference. Just to give a few examples on the economic level, the cocoa price was forced down, and promptly raised after the 1966 coup. Investment and credit guarantees were cancelled. On the domestic political level, Nkrumah and his colleagues were subjected to violence in the form of assassination attempts on his life and a relentless character assassination campaign. The pressure on Nkrumah professionally and personally was beyond anything you might imagine. Despite this, no one was ever executed for attempting a coup against Nkrumah's government or for attempting to murder Nkrumah. And this was because Nkrumah was strongly opposed to this.

I believe there has been a big campaign to taint Nkrumah's name and reputation. Nkrumah is not here to defend himself against those accusations. Like you, I am asking questions

concerning the curb of freedom: Was he misled by certain advisors? Did he get distracted and not control what some of those around him were up to?

But what I do know is that Nkrumah was not interested in power for its sake. Neither was he a man who amassed personal wealth at the expense of his country.

Why do I say all this in connection with these accusations? Because, most dictators are all those things: corrupt, violent and only interested in securing power. Nkrumah was not any of these.

RT: Do you think he rushed Ghana into Independence too early?

Samia: Political independence was not regarded as an end in itself but the means to achieve economic freedom and advancement. After years of colonialism, Ghana had no industries, no skilled work force, and no infrastructure. Only after independence did the full truth about the extent of our economic backwardness become known. A colonized State is developed in a way that serves the colonizer. Colonialism was not only economic, but cultural and social. Why would any one want that for themselves?

The struggle for political independence is not putting the whole blame on the colonizer. Slavery and colonialism, like all the present ills of our society, could not have happened without the consent of some of us.

Likewise, our most intractable problems would never be solved, and here I'm thinking of long-term solutions and not just quick relief, without an African solution. This is not because we don't respect people's advice, but because the best solutions have to be specific to a certain context and born out of real life experience.

RT: Let me get back to the issue after Nkrumah's overthrow from power. What happened to the family when you went back to Egypt?

Samia: We went to live in Egypt where the government of the day took full care of us providing us with a house and financing our education. The government of Egypt met our every need and I am grateful for that. We were very lucky unlike many other children who are caught up in political conflicts all over Africa and the world.

RT: Your family after some years came back to live in Ghana. Tell me what happened and you left again.

Samia: We arrived in Cairo the same day of the coup and where we lived till 1975 when the Government of the day in Ghana, the Military Government with Gen. Acheampong as Head of State invited us back. By the early 80s', we were all out of Ghana. My mother had decided she would be more comfortable in Cairo. Gamal and Sekou were already outside

the country studying in England and Romania respectively. I ended up in the UK too where I lived for almost 10 years, working and studying.

RT: Do you feel any resentment against the people who overthrew your father from power? Certainly life wasn't the same isn't it?

Samia: You are right. Life was never the same. But I strongly believe things happen for a reason, and if you keep an open mind, the reason is always a good one. Being Nkrumah's daughter has taught me a great deal about humility. We are not talking here about a mere sentiment. I can sincerely say that the pain and confusion have served me very well. I had to wipe the slate clean. I have made an effort to understand what Nkrumah tried to do and that has led me to embrace all Ghanaians and Africans in my thoughts.

Understanding his ideas led me to those thoughts and that cancelled all the resentment. I understand clearly that we are an inseparable part of a whole nation. Being Kwame Nkrumah's daughter means being a daughter of Ghana and Africa and having a responsibility to Africans everywhere.

We worked hard and tried to make ends meet like most ordinary people and I am very grateful for that. How else could I really understand people who are struggling if I had an easy time myself?

I have not found to date any solution that is better articulated and that makes more sense than the Pan-African project as he explains it. At the same time, I fully respect those who might not agree with Nkrumah's ideas.

I do not condone violence in any form but I respect differing opinions.

RT: How often do you visit Ghana and do you still have family ties there?

Samia: I haven't been back since 1984. Two of my brothers, Francis and Sekou, are there with their families. We've also got some family from Nkroful and one day we hope to establish stronger links with them.

RT: Do you think Dr. Kwame Nkrumah would have achieved his objectives on Africa if he's not been overthrown. Africa is a continent with diverse languages, tribes, cultures etc.?

Samia: Nkrumah is quoted as having said, "I have often been accused of pursuing the policy of the impossible but I cannot believe in the impossibility of achieving African unity any more than I could ever have believed in the impossibility of attaining African freedom ...". Just consider this: By 1963, around 44 years ago, Nkrumah had called for an all-African Commission to take steps to set up a common market for Africa, an African monetary zone, an African Central Bank, a Continental Communications System, an

African common currency, a Commission for a common citizenship ... Today the European Union is implementing these plans. What does that tell us?

RT: How old would Dr. Nkrumah be today if he's to be alive?

Samia: Well, he was born in 1909, or 97 years ago.

RT: How do you view the situation in Ghana today – economic, social, infrastructure, governance and the people in general?

Samia: Ghana is politically stable and has a good standing among African countries and internationally. Understandably, like all so-called developing countries it is grappling with the all too familiar challenges of unfavourable trade rules and a high import bill that naturally adversely affects economic and social activity.

RT: Do you have any intention to settle in Ghana some time to come?

Samia: A friend once told me that there is a right time for everything and I think that is very apt to every occasion. I have never ruled out settling in Ghana eventually and when the right time comes, I may very well decide to do just that.

RT: Dr. Kwame Nkrumah wrote many publicised books, which of these books are your favourites and what was he talking about?

Samia: 'Revolutionary Path' competently puts together all of Nkrumah's political ideas and it also contains extracts from other writings. 'Africa Must Unite' gives a general idea of early independent Ghana and how it fitted in with the African Unity project. The 'Challenge of the Congo', shows how far Nkrumah saw Ghana and other African countries' interlinked paths. 'The Conakry Years' published posthumously also gives an idea of the range of his thoughts.

RT: What do you think the future holds for Ghana?

Samia: More progress, I hope. We have an opportunity before us these years. This year is the 50th Anniversary of Independence. Ghana is holding the presidency of the AU. The country is politically stable and advancing democratically. This is good time to plan ahead.

RT: What have you been doing presently?

Samia: I am currently living in Rome working as a Freelance Journalist. I am also a program and students coordinator with the University of Arkansas Rome Centre. I am part of an African Association bringing together a number of African immigrants together. I am married to Michele Melega, an Italian-Danish man, and we have one child, Kwame, who is 9 years old.

RT: Any other comments?

Samia: I simply want to thank you for giving me the opportunity to voice my thoughts on Nkrumah.

RT: Thanks for this interview, Samia, I appreciate your willingness to talk to me.

② Africans voice anger as they mark the abolition of slavery Daily Mail (27 March 2007)

Africans voiced their anger at a ceremony in Ghana to mark 200 years since Britain abolished the slave trade on Sunday, with some saying they could not forget how the white man maltreated their ancestors.

Ghana, which celebrated 50 years of independence from Britain this month, is commemorating the bicentenary with a ceremony at a white-washed former slave fort at Elmina with singers and performers from Africa, the Caribbean and London.

Many expressed outrage at the brutality of a trade that shipped more than 10 million – some estimates say up to 60 million – Africans into bondage. Many did not survive.

Drummers of the African diaspora perform in the yard of Elmina castle in Cape Coast, Ghana, to mark the 200th anniversary of the abolition of slavery in Britain. The castle used to be a trading post for slaves in the 15th century

“It was so bad the way they maltreated our forefathers, the way they chained them and imprisoned them for so many years,” said Anthony Kinful, 38, a storekeeper. “If I see white people now, I think badly of them.”

Britain’s first black cabinet minister Baroness Valerie Amos, herself a descendent of slaves who was born in Guyana, was due to attend the ceremony with South African jazz icon Hugh Masekela and Jamaican-born reggae dub poet Linton Kwesi Johnson.

Ghana’s President John Kufuor is to take part and British Prime Minister Tony Blair will make a recorded statement. A senior Church of England cleric called for him on Sunday to make a formal apology for the slave trade.

“A nation of this quality should have the sense of saying we are very sorry and we have to put the record straight,” Archbishop of York John Sentamu told the BBC.

The anniversary has raised awareness of modern-day forms of bondage, from illegal chattel slavery still practiced in some nations in Africa's dry Sahel belt, to mafias which traffic African girls as prostitutes to the West.

"The main point is for us to realise that it is wrong to think this belongs in the past," said Ghanaian poet Kofi Anyi Doho, due to address the afternoon ceremony.

"The traffic in human beings is clearly not over. There are no boats to anchor next to a slave fort but people are being forced into ... a form of enslavement all over the world."

Portuguese traders built sub-Saharan Africa's first permanent slave trading post at Elmina in 1492. It passed into Dutch and English hands and by the 18th century shipped tens of thousands of Africans a year through "the door of no return" onto squalid slave ships bound for plantations of the Americas.

After years of campaigning by anti-slavery activists like politician William Wilberforce, Britain banned the trade in slaves from Africa on March 25, 1807.

Slavery itself was not outlawed by Britain for another generation, in 1833, and the transatlantic trade continued under foreign flags for many years.

When Kufuor visited London this month, Blair said Britain was sorry for the slave trade in one of his strongest statements of regret on a thorny subject for European governments wary of African demands for reparations.

入 会 者

キース・バイアマン 氏

インディアナ州立大学英文科教授。アフリカン・アメリカン文学および文化専攻。『アフリカン・アメリカン・レビュー』誌副編集長。編著は、Critical Essays on John Edgar Wideman, with Bonnie TuSmith, (Knoxville: U of Tennessee P, 2006), Remembering the Past in Contemporary African American Fiction (Chapel Hill: U of North Carolina P, 2005), The Short Fiction of John Edgar Wideman (Boston: G.K. Hall, 1998), Seizing the Word: History, Art, and Self in the Work of W.E.B. Du Bois (Athens: U of Georgia P, 1994), Fingering the Jagged Grain: Tradition and Form in Recent Black Fiction (Athens: U of Georgia P, 1986)など。現在、クラレンス・メイジャーに関する著書を執筆中。

志水 光子 氏

現在、日本女子大学大学院博士課程後期に在学しています。修士時代はAlice Walker, Toni Morrison, Zora Neal Hurston, など黒人女性作家を中心に研究してまいりましたが、現在は、さらに視野を広げて、黒人女性作家を含む南部女性作家の研究をしています。よろしくお願ひ致します。

Nahum D. Chandler 氏

Professor, School of Global Studies, Tama University
802 Engyo, Fujisawa, Kanagawa, JAPAN 252-0805

(順不同)

会 員 消 息

片岡 幸彦 氏

高廣 凡子 氏

小林 憲二 氏

3月に立教大学を定年退職。小林憲二編著『変容するアメリカ研究のいま』(彩流社、2007年3月)を刊行。

風呂本惇子 氏

論文「"精霊"の息づかいを聴くーハイチ系移民女性作家チャンシーとダンティカの商品から」を2007年3月、上記小林氏編著の書物に発表。

(順不同)

訃 報

岡田 正夫 氏

長い間、敦賀市の高校で英語を教えられ、黒人文学研究にも取り組んでこられた会員の岡田先生が昨年12月4日に亡くなりました(77歳)。ご逝去を悼みます。なお、2007年3月には、岡田正夫著『Freedom and Solitude: Richard Wright's The Outsider』(私家版)が刊行され、奥様の美枝子様より研究会にも寄贈していただきました。

センベージュ・ウスマン 氏

セネガルの作家・映画監督センベージュ・ウスマン氏が6月9日、ダカールの自宅で死去した。84歳だった。『黒人沖仲仕』(1956)以降、『セネガルの息子』(1957)から『ニーワン』(1987)に至る10編近くの長・中・短篇集を刊行、半数以上が邦訳された。仏語による小説を読むことができない民衆に語りかけるため、モスクワで映画製作を学び、自作小説の映画化も心がけた。いくつかの国際賞を受賞し「アフリカ映画の父」と呼ばれ、女子割礼を扱った「母たちの村」(2004)は、日本でも公開中である。

(文責・

古川博巳)

Coda～編集後記にかえて

いわゆるアフリカン・ディアスポラの人々の持つ文化がしなやかでいてしかも強靱であることに驚かない人はいないでしょう。想像を絶する彼らの逆境を思うとき、物理的暴力では

なく、ことば、音楽、ダンス、身振りなど独特の創意に満ちた表現法で自己とそのまわりの世界を冷徹に観察し、いまだ実現しない自由を希求してきたことは記憶にとどめられるべきです。ある歴史家の表現をかりれば、その残虐さにもかかわらず、「奴隷制は奴隷たちが自立した文化のシステムを刻み出すことを妨げ、彼らのバイタリティを破壊し、他者に依存するしかない子供のような状態にしてしまうほどは」完璧な抑圧のシステムではなかったこととなります(Lawrence Levine)。これは決して奴隷制が生易しいものだったという意味ではなく、奴隷たちの文化的抵抗力・創造力のたくましさを賞賛したことばです。

翻って現在のアフリカを眺めてみると90年代以降、それまで冷戦イデオロギーによって覆い隠されていた部族間対立、宗教対立による地域紛争の多発、加えてエイズの蔓延、貧困問題もあり絶望的な状況を呈しています。この深刻な状態を少しでも軽減するためには、かれらの強靱な自己回復力に任せているだけでは不十分です。今ほど世界がアフリカに手を差し伸べることが求められている時代はないのかもしれませんが。

<編集> 黒人研究会・編集部
〒603-8143 京都市北区小山上総町
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

<編集者> 鉄井孝司